

思想的拠点としての「内鮮一体」*

— 崔載瑞「民族の結婚」を中心に —

田村 榮章**

(e-mail: 15050604@wonkwang.ac.kr)

目次

1. 序論
 2. 『国民文学』 — 雑誌存続への拘泥
 3. 金庾信の拘泥と崔載瑞
 4. 金官伽耶と朝鮮 — 「内鮮一体」の現実と崔載瑞
 5. 崔載瑞の闇
 6. 結論
-

1. 序論

1945年1月、朝鮮半島における植民地期最後の文芸雑誌『国民文学』に崔載瑞¹⁾の日本語小説「民族の結婚」が発表される。²⁾この「民族の結婚」は、13世紀末に高麗の僧一然によって書かれた、私撰の史書である『三国遺事』、および朝鮮半島に現存する、最古の歴史書である官撰の『三国史記』(金富軾編纂、1145年完成)に記録された話を元に作られた歴史小説である。²⁾しかし、『三国遺事』や『三国史記』における元

* 이 논문은 2013년도 원광대학교 교내연구비로 연구함

** 円光大学校 師範大学 日語教育科 助教授

1) 本論と関係し、崔載瑞が『人文評論』廃刊後、『国民文学』を創刊し、その編集発行人となり、1945年まで雑誌を発行し続けた上での苦悩と、『国民文学』を取り巻く状況について論者もかつて論じたことがある。(拙論「『国民文学』の変容 — 崔載瑞1941—1945」)(『日本語文学』第32輯 韓国日本語文学会 2007年3月)

2) 「民族の結婚」は、『国民文学』1945年1月号と、翌2月号(第5巻第1号・第2号)に発表。なお崔載瑞は創氏改名以降、石田耕造と名乗ったが、この作品はペンネームである石田耕人名で発表されている。

2) 『三国遺事』および『三国史記』は次の書を参照した。一然著 金思燁訳『完訳 三国遺事』明

の記述は、それぞれ「太宗春秋公」および「文武王（上）」の章の中のいずれも極わずかでしかなく、「民族の結婚」は、物語の枠組みだけを借りた、そのほとんどが崔載瑞の創作であるといってよい。それはさながら、『今昔物語集』『宇治拾遺物語』を題材に、芥川龍之介が創作した「芋粥」「藪の中」「地獄変」などを思い浮かべてもよいだろう。このように、基本的な設定のみを『三国遺事』や『三国史記』を基にしている「民族の結婚」だが、崔載瑞はその内容を深く掘り下げて、当時の植民地支配下という状況下においての日本に対して、そしてまたは植民地下にある朝鮮という自国に対する朝鮮人の複雑な感情や思いまでをもうかがわせる内容を描いている。

崔載瑞は1945年までに、自身が編集発行人であった『国民文学』を中心に、日本語小説を5編残している。その5編は、「報道演習班」³⁾・「燧石」⁴⁾・「月城君の従軍」⁵⁾・「非時の花」⁶⁾、そして「民族の結婚」の5編である。いずれも朝鮮人の徴兵制が決まり、総動員体制が苛烈化していく中で、『国民文学』を含めた各雑誌もまた執筆者が減り、それぞれの雑誌存続が危うくなってきた以降に書かれたものである。この中でも「報道演習班」・「燧石」、および「月城君の従軍」は時局小説であり、露骨な戦争賛美や皇国賛美の箇所が多々描かれていることもあり、作品としての深みはなく、よって芸術性も低いものとなってしまっている。しかし一方、「非時の花」は「民族の結婚」同様、歴史小説であり、作品の評価は当時から非常に高かった作品である。⁷⁾だが、この「非時の花」もまた、日本賛美や皇国賛美の箇所が多々描かれていることもあり、それらが作品的価値を貶めている感は否めない。よって作品としての深み、また芸術性は、「民

石書店 1997年11月 110～111頁。金富軾著 林英樹訳『三国史記 上 新羅本紀』三一書房 1974年12月 p.107。

3) 『国民文学』第3巻第7号 1943年7月

4) 『国民文学』第4巻第1号 1944年1月

5) 『緑旗』緑旗連盟 第9巻第2号 1944年2月

6) 『国民文学』第4巻第5号～第8号 1944年5月～8月

7) 例えば、評論家加藤武雄は次のように述べて「非時の花」を絶賛している。「最近読んで感心した作に、石田君の『非時の花』があるが、国語文学として、内地人の作に劣らぬ練達さを見せてる。

(中略)『非時の花』は、朝鮮の文壇にあらはれた本格的な歴史小説として少なからぬ感興を喚ぶ。」(加藤武雄「朝鮮の文学について」『国民文学』第5巻第3号 1945年3月 p.11)。なおここでの文末には、「(十九年三月十九日)」と書かれている。このことから加藤武雄は、おそらく当初は『国民文学』に寄稿するために、この「朝鮮の文学について」を書いたのではないことがわかる。

ちなみにこの頃、『国民文学』は毎号執筆者不足に悩まされていた時期であり、崔載瑞は「民族の結婚」が載った1945年1月号の「編輯後記」では、「年末も年始もない。この雑誌などもぶつ通しでやって来た。それでみてやつと今日お目見えする次第である。一冊の雑誌が読者の手許へ届けられるまでにどれだけの困難を突破せねばならないか、想像して戴きたい」とその苦労を語っている。だがしかし、この号は全96頁にすぎなく、さらに、この実際の掲載より約1年前に書かれた加藤武雄の「朝鮮の文学について」が載った『国民文学』1945年3月号の場合、こうした苦労にもかかわらず、わずか全77頁となっている。これは創刊号(1941年11月)の全240頁の3分の1以下という頁数に過ぎなかった。この「朝鮮の文学について」の掲載は、『国民文学』誌におけるこうした事情があった上であったと見てよいであろう。

族の結婚」と比べ低いと言わざるを得ない。そうした中で「民族の結婚」はイデオロギー臭はなく、露骨な日本賛美の箇所もまた見られない。こうしたところからも、作品の完成度、および芸術性は非常に高く、崔載瑞の日本語作品の中での最高傑作と呼ぶにふさわしい作品であるといえる。

この「民族の結婚」に関しての先行研究だが、現在までほとんどないと言ってよい。管見の範囲では、保坂祐二(2005)、李慧眞[Lee Hae Jin 이혜진](2011)、宋ビョンサム[Song Byeong Sam 송병삼](2013)の3本のみで、このうち「民族の結婚」をほぼ単独で考察しているものは保坂の研究のみしかない状況である。8)まず保坂は「民族の結婚」を、実際の崔載瑞がこの作品を書いた時期の状況と重ね合わせて、「大東亜共栄圏を建設するためには、日本と一つになる努力が必要であり、その努力に日本は応えてくれるであろう」という観点が強調された歴史小説⁹⁾と見ている。

一方、様々な見解のある新羅の花郎に言及し、戦争遂行と「内鮮一体」、および徴兵制に結び付けて論じているのが李慧眞である。李慧眞は、「「民族の結婚」は、帝国日本戦争遂行の主体を構成するために形成された「内鮮一体」イデオロギーの変調」であり、「周知のように「内鮮一体」は、「徴兵制」のための「皇国臣民」の作成の一環として採用されたイデオロギー」であり、「この時、新羅固有の制度として忠軍愛国精神の理想・精神的首長の地位を獲得した花郎は」「徴用を奨励する過程で、日本の戦争英雄物語との出会いから、自然に日本の武士道と接続されている国のために聖戦に参加する精神的実行の表象となった。」この「新羅の三国統一の主要な動力となった花郎は、ナショナリズムに基づく国家の干城として戦争に服務しなければならず、学徒兵を動員するときに最適な死業精神の象徴として活用された」¹⁰⁾ののだとしている。

また、宋ビョンサムは「「民族の結婚」は、帝国日本が戦争遂行の主体を構成するために形成された「内鮮一体」イデオロギーの植民地朝鮮人の立場からの積極的な変調」と見ており、また「大東亜戦争を実行するための主体形成としての内鮮一体思想を受容するよう徴兵を奨励するために、国への忠誠を高揚する花郎精神の英雄的な凡例を強調した」¹¹⁾という点で、李慧眞論をほぼそのまま踏襲しているが、一方で「民族の結婚」は、「自我が日本という大きな対象と一体化する体験を欲望し、歴史を対象化して叙事化した

8) 保坂祐二(2005)「崔載瑞の日本語歴史小説考察 — 小説「民族の結婚」を中心に」『日本言語文化』第7輯 韓国日本言語文化学会、李慧眞[Lee Hae Jin 이혜진](2011)“총동원체제의 최재서의 일본어소설”『批評文学』No.41 한국비평문학회、宋ビョンサム[Song Byeong Sam 송병삼](2013)“역사를 이야기하는 욕망, 주체를 구성하는 서사 - 신채호의 꿈하늘의 경우와 최재서의 비시의 화, 민족의 결혼의 경우”『南道文化研究』Vol.25 순천대학교 남도문화연구소。

9) 前掲、保坂論文 p.243

10) 前掲、李慧眞論文 p.376・377・379。引用文は論者自訳

11) 前掲、宋ビョンサム論文 p.333。論者自訳

ものと見」、「そして、歴史は自我の外部に観察された一種類のエピソードとして活用しており、その叙事的自我は可視的に論評者の声を示しているものと見ることができる」¹²⁾としている点にその独自性があると言えよう。

1941年11月から1945年5月まで発行された植民地期最後の文芸雑誌である『国民文学』の編集発行人であった崔載瑞は、『国民文学』が日本語雑誌であったという雑誌の性格から、朝鮮語抹殺という総督府の統治政策に積極的に協力した親日的人物である、というのがこれまでの彼に対する評価であった。だが、あくまでも当時の状況において考えた時、こうした一元的な見方でおさまるほど単純であったとはいえないだろう。それは「民族の結婚」を見ることにおいてもまた、新羅に取り込まれた金官伽耶の王族出身である主人公金庚信が、新羅の武将となりながらも、伽耶族としてのアイデンティティを保ち続けるその思い、または様々な葛藤や軋轢が描かれているが、そうした主人公金庚信の内面のうちにもまた、崔載瑞の複雑な思いがこめられ、重ねられているといえる。果たしてそれは崔載瑞のどのような思いなのか。このように、「民族の結婚」を考える上での崔載瑞の複雑な思いは、特に『国民文学』誌が発行されて以降の崔載瑞を取り巻く社会的、体制的状況の変化、または、総督府や朝鮮文人協会に代表される体制側との関係なども見ていくことで伺えるものである。よって、本稿ではいずれの先行研究でも見られなかった、『国民文学』誌発行以降の崔載瑞状況を関連付けて考察する。その際、崔載瑞を無条件に体制協力をした人物であるという見方を離れ、むしろ崔載瑞自身の苦悩に着目をし、作品が発表された1945年という戦争末期の当時の社会状況を含め、合わせて考察したい。

2. 『国民文学』 — 雑誌存続への拘泥

雑誌『国民文学』は、1941年11月、『人文評論』の編輯兼発行人であった崔載瑞によって人文社より刊行され、1945年5月まで続いた月刊文芸雑誌である。そのうち1941年12月号と1942年9月号は休刊、1942年5月6月号は合併号で、1945年4月号は発行されたかどうか不明である。¹³⁾創刊当時、1月・4月・7月・10月の年4回が日本語版、残りの年8回は朝鮮語版の予定で創刊。それは朝鮮半島で唯一の、そして結果的に植民地期最後の文芸雑誌の発刊となった。『人文評論』が廃刊させられた後であった崔載瑞にとって、上記のような創刊予定の取り決め一つにしても並々ならぬ苦勞があったと推測できる。創刊号における「編輯後記」には、再び新たに文芸誌を発行させることをできたという編輯

12) 前掲、宋ヒョンサム論文 p.343。論者自訳

13) 参照、大村益夫「『国民文学』解題」（人文社編 復刻版『国民文学』別冊 緑蔭書房 1998年4月 p.5~6）

発行人である崔載瑞の責任感あふれる様子と気合いが伝わってくる。

文芸雑誌統合後の創刊号を出すに当って様々な感懐が徂來するを覚える。その中でも半年以上雑誌を休んだことに対しては、その理由が如何に拘らず、編輯者としては誠に相済まない気がしてならない。文壇空位時代と云う言葉もちらほら聞えて來たがそれも身に沁みて痛^{ママ}かったこの緊迫した時世になすことなくしてと云う自責の気持は文人以外の人には想像も付かぬ事柄であろう。兎も角この用紙飢饉の時代にこれだけの文芸雑誌が保証して貰えたことは有難いことだ。この点吾々は率直に感謝の念を持つべきである。14)

崔載瑞にとってみればこの時、総督府の政策の中で許される限りで「文壇空位時代」からの文芸復興を目指そうという思いがあったに違いない。つまり、「文壇空位時代」をくい止めるには自分しかないという自負と、「自責の気持」が崔載瑞自身に強くあったといえるだろう。こうしたことから、『国民文学』誌の全体像をとらえる場合、『国民文学』イコール、総督府の統治政策や朝鮮語抹殺に積極的に協力した親日雑誌という一元的な見方でおさまるほど単純とは思えない。15)

しかし、この崔載瑞の意気込みをくじく事態が早速創刊翌月に起こる。それは創刊翌月の第2号の朝鮮語版が、掲載原稿が集まらず休刊となったことであった。この創刊初回の朝鮮語版が頓挫したことにより、以後の年4回の日本語版、残りの8回の朝鮮語版という当初の発行計画が、すでにこの時から実現不可能なものへと変わっていく。

またこの頃、失意の崔載瑞にさらに追い討ちをかける不幸な出来事が起こる。それは四男剛の突然の死であった。四男剛は、死の2ヶ月前に風邪がもとで肺炎となり、『国民文学』が創刊されて間もない11月15日にわずか満3歳で肺血症で亡くなる。『国民文学』1942年1月号には、その死の9日後の日付の記した崔載瑞による追悼文が載せられている。この最後で崔載瑞は、亡き息子と『国民文学』とを重ねて次のように述べている。

考えてみると、この雑誌とお前とは浅からぬ因縁がある訳だ。創刊号の準備で走り廻っている最中にお前は病気になった。お前の病気がこじれてゆくにつれて雑誌もいろいろと故障を起し、難儀に難儀を重ねた。二つとも身に余る重荷を持って余して、私は自分の無力をつくづくと歎いたことだった。そして雑誌がいよいよ出て新刊広告が新聞に発表された日にお

14) 「編輯後記」『国民文学』第1巻第1号 1941年11月

15) 大村益夫はこれに関して、「絶対的権力を持った総督府と、その許容範囲の中で文学活動をしようとした朝鮮人文学者との矛盾、あつれき。太平洋戦争直前に創刊され日本の敗戦直前に終刊した『国民文学』の性格の三年半のおける変化と時局の変遷との関係。主幹とそれを背後から支えた京城帝国大学英文科スタッフとの関係。これらが複雑にからみあっている」と述べている。(前掲大村益夫「『国民文学』解題」p.8)

前はこの世を去ったのだ。

然しお前の意識が未だ分明している間に雑誌をお前の枕辺に飾ったことだけがせめてもの慰みだ。

私はお前だと思って『国民文学』を育てるつもりだ。お前の思い出と共に『国民文学』は伸びゆくであろう。

— 子よ、安らかに、神の御胸に眠れかし。16)

崔載瑞はその悲しみを押し殺すかのように、さらに『国民文学』の編集・発行に邁進する覚悟をかためる。しかし、崔載瑞の熱意にもかかわらず、上記の創刊初回の朝鮮語版が頓挫したことにより、結局、朝鮮語のみの『国民文学』は一度も発刊されず、1942年の2、3月に朝鮮語の小説や詩が数編掲載されただけという新たな挫折も味わうこととなってしまふ。

この後、「苦悶を抱いて寝られぬ」夜を過ごし続けた末、「又もや革新せねばならなくなつた」17)崔載瑞は、1942年5・6月合併号より『国民文学』を「国語」雑誌へ転換させることを決意する。しかし、彼は朝鮮語による文学の発行を決してあきらめたわけではなかった。

尚これは今日直ちに諺文文学の廃止を意味するものではなく、智識階級が率先して国語を常用すべきを示唆するものであります。今日に於いて一般大衆に取つて諺文文学が必要欠く可からざるものであることは論を俟たぬ所でありますので、弊社は年数回程度の諺文創作集を発行致し、この方面に於いても弊社が抱懐せる革新運動を続けるつもりであります。皆様の御協力に切望して止まない次第であります。18)

だが、こうした彼自身の思いもすぐに崩れてしまうことになる。「国語」雑誌への転換を発表した2ヶ月後、1942年8月号において崔載瑞は評論「朝鮮文学の現段階」19)を掲載する。ここで「屢次の折衝の結果、当局との間に取極められた「国民文学」編輯要綱」として次の7つを挙げている。その7つは、(1) 国体觀念の明徴 (2) 国民意識の昂揚 (3) 国民士氣の振興 (4) 国策への協力 (5) 指導的文化理論の確立 (6) 内鮮文化の綜合 (7) 国民文化の建設である。これらは崔載瑞が述べていることではあるが、しかしこの考えはあくまでも「当局」の考えであった。「当局が朝鮮文学に対して意外な関心と熱意とを持ってられることを知って、筆者は安堵と同時に深い感激を覚えた次

16) 「子よ安らかに 亡児剛に贈る」『国民文学』第2巻第1号 人文社 1942年1月 p.93

17) 崔載瑞「編輯を了へて」『国民文学』第2巻第5号 1942年6月 p.208。

18) 「国語雑誌への転換」『国民文学』第2巻第5号 1942年6月 p.44。

19) 崔載瑞「朝鮮文学の現段階」『国民文学』1942年8月号 第2巻第7号 人文社 以下引用 p.12~13。

第である」と白々しささえ感じられる文章には、崔載瑞自身の過度の干渉と束縛に対する不満の表明にも見える。その証拠に、「『国民文学』は年四回国語版、八回諺文版と云う新しい行き方で当時の情勢に対応してきたのであるが、然しこれは過渡的体制で、全頁国語の問題にぶつ付かるべきは当初から予想される所であった」と、わずか2ヶ月前までいまだあきらめきれない朝鮮語による『国民文学』の発行の夢を語っていた自らの言葉を簡単に否定していることからもうかがえるだろう。

3. 金庾信の拘泥と崔載瑞

「民族の結婚」は、金庾信が蹴鞠に金春秋を家に誘った際、金春秋の着物を誤って踏んでしまい、紐が取れてしまった上着を縫わせるために文姫を金春秋に引き合わせ、それにより、自身とその場を離れ、二人きりにさせたことにより、その結果文姫が妊娠することになる。二人が結ばれるのを願った金庾信が用事を装って外出したことが契機となつての妊娠であったが、金春秋にとって新羅王族には伝統的に父母共に王族に属する者同士でなければ結婚できないという「聖骨」という制度があり、こうしたきたりと金官伽耶の王家の末裔である文姫に対する愛との板挟みで、金春秋は大いに苦しむこととなる。悩む金春秋に金庾信は、文姫を妻に迎えることは、「澱んだ聖骨の池に真清水を注ぎ、新しい流れで新羅を潤す」ことであり、「妹一人との結婚とお思召しなさらないで、駕洛族とのご結婚だとお思召し下さい」²⁰⁾と訴える。

金庾信は一人、文姫を、新羅王族の「聖骨」である金春秋の妻にさせることに徹底的にこだわっている。並大抵ではない新羅の王族のなかに伝わる「聖骨」というきたりを取り払い、伽耶王族出身である妹の文姫を新羅の王妃にさせるということへの金庾信のこだわりの理由がうかがえる場面が、父を前にした際に、金庾信が父に言う言葉に表われている。

「聖骨」という制度の絶対性を知っている父は、『お前は妹めをそれ程卑しめてまで新羅王族に仕へなくてはならぬのか?』と、「一層の險悪さを帯び、今にも息子に飛びかゝらん氣勢である」。こうした父を前に、金庾信は自身の考えを次のように表明する。

『あの晩のことは全く小子の不覚で、幾重にもお詫び申し上げます。然しかうなつた以上は妹は春秋公のところへお嫁に参るが至当かと存じます。而もそれは妹を卑しめるためではなく、妹をもつともつと高めるためであります。駕洛族に対する新羅族の謂れなき侮蔑…妹の婚姻に依つてそれが一挙に打ち砕かれれば小子の本望でございます。』²¹⁾

20) 以上『国民文学』第5巻第1号 p.95。

21) 『国民文学』第5巻第2号 p.48

『お前は妹めをそれ程卑しめてまで新羅王族に仕へなくてはならぬのか?』と言う、ここでの金庾信の父の言葉は、まさに駕洛族の人々における新羅族に対する複雑な感情を代弁するものであるといえるだろう。ここからはまた、この新羅に併合された駕洛(金官伽耶)族にとって、これまでの新羅族との関係は決して友好的な関係ではなかったことがうかがえる。実際、新羅に取り込まれた金官伽耶は、金庾信の高祖父である金官国第10代仇亥王の時代、『新羅は駕洛経略のために、幾度か洛東江を朱に染め』、『沿岸の土地は毎年のやうに戦禍を蒙り、両国の人民は寧日もない有様』であるのを見て、仇亥王は『その惨状を深く憐んで新羅との合体を決意し』、『飽くまでも自らの識見と自らの意志とを以て新羅と合併された』という。だが、しかしその内実は、『あれからも既に六十年の歳月が流れ』たにもかかわらず、『駕洛族との関係は決して円満とは申せ』ないという状況であった。また、一般の駕洛族の人々においては、『人心に至っては殆ど新羅に背いてゐると云つてもよい有様であり』、『彼等は太陽を奪はれた暗黒の民の如く、あてどもなく迷ふ有様であつた』。

金庾信にとって、文姫が新羅の王妃になることへのこだわりは、決して文姫一人のためや、王族出身であるからといった一族のプライドのためというものではなかった。それは、これまで受けてきた『新羅族の謂れなき侮蔑』を耐え忍んできた『駕洛族に対する』こだわりが根幹にあったからだと言えるだろう。つまり、このこれまでの被支配民族である駕洛族に対する新羅の『謂れなき侮蔑』が、『妹の婚姻に依ってそれが一挙に打ち砕かれ』、それによって結果的に駕洛族出身のすべての者に対する地位向上となることを願ったのである。金庾信は金春秋に対して説得を試み、「両手を広げて胸を開」くことで、妹一人を受け入れるだけでなく、『両手を大きく広げて胸一杯に駕洛族を迎え入れて下さい』と、駕洛族のすべての人民を受け入れてほしいと金春秋に要望したのである。

このように、新羅に併合された駕洛(金官伽耶)族にとって、新羅族とは決して友好的な関係ではないことがわかったが、ここからは当然、当時の朝鮮人における日本人への感情へと想像が及ぶ。新羅に忠誠を尽くす駕洛族出身の金庾信と、当時、すでに唯一の朝鮮半島における文芸雑誌であった『国民文学』の編輯発行人として文壇空位時代を作つてはならないという一念で、また息子の死をも乗り越えて『国民文学』を発行し続け、その間数々の朝鮮総督府による干渉から「苦悶を抱いて寝られぬ」夜を過ごし続け、その都度、編集方針を変えながらも雑誌発行に熱意を燃やし、同じように忠誠を尽くしてきた崔載瑞。ともに被支配民族の出身者として、支配民族に忠誠を尽くし、認めてもらうことで自らの民族の地位向上をはかりたい彼らだったが、そうした彼らの考えと民衆との乖離は時代差があれども共通していた。²²⁾彼らの共通点は他にも、それぞれが新羅や日本という支配民

22)例えば、朝鮮総督府発行『秘 朝鮮施政の一斑』(1937年1月)には、「思想犯罪概況」として、「昭和十一年(引用者註:1936年)十月一日現在ニ於ケル該事件ノ檢舉人員ハ実ニ千六百八名ニ連シ面モ之等団員ハ極力警察官憲ニ反抗シテ傷害ヲ加ヘ或ハ強盗ヲ犯シ或ハ彼等ノ企劃ニ賛同セサル

族に支配されてすでに何十年か経った状況の中で支配民族に忠誠を誓い、支配下という状況下での被支配民族である篤洛族や朝鮮民族の地位向上を目指したという点が挙げられる。崔載瑞にとってその思想的拠り所となったのが、「内鮮一体」という言葉であった。

4. 金官伽耶と朝鮮 — 「内鮮一体」の現実と崔載瑞

金庾信の高祖父である金官国第10代仇亥王は、『飽くまでも自らの識見と自らの意志とを以て新羅と合併された』とされている。この金官伽耶は当然、日本の植民地となった朝鮮になぞらえられている「民族の結婚」では、ここで朝鮮もまた日本によって併合されたわけではないという当時の日本側のメッセージを当てはめている。崔載瑞もまた、「朝鮮は植民地ではない。朝鮮を植民地視するものがいたらなぐりつけろとは我等の総督南閣下の半島の代表的インテリに与えた言葉である」²³⁾といった言葉を信じていたといえるだろう。この朝鮮総督南次郎の時代(1936年8月～1942年5月)は、植民地統治期中もっとも急進的な皇民化政策がとられた時期であるが、南は例えば、次のようにも述べている。

「半島人は如何にせば完全なる日本人となり得る」か「内地人は如何にせば半島人と一体となりて 聖旨に副ひ奉り得る」かを考ふべきである。(中略)

私が常に力説します事は「内鮮一体」は相互に手を握るとか形が融合するとか云ふ様な、そんな生温いものぢやない。手を握る者は離せば又別になる、水と油も無理に掻き混ぜれば融合した形にはなるがそれではいけない。形も 心も、血も、肉も悉くが一体にならなければならん。(中略)

さして内鮮一体の最後は内鮮無差別平等に到達すべきである。²⁴⁾

挨拶の席上での速記であるが、南の言葉の巧みさ、そしてカリスマ性をもうかがわせる内

者ニ対シテ殺傷其ノ他ノ危害ヲ加ヘル等頗ル凶暴ヲ極メテ居ル状態テアリマシテ如斯極左分子ノ策動ハ最近著シク活発ノ度ヲ加ヘタルノ感カアリマス」(■不明。頁記載なし。引用は、民族問題研究所編『日帝下戦時體制期 政策史料叢書 第49巻 総動員政策斗 團體1』韓國學術情報 2001年4月 p.292～293)とある。つまり、こうした多発していた思想事件からも、一般民衆と崔載瑞との乖離をうかがい知ることができる。

23) 玄永燮『新生朝鮮の出発』大阪屋号書店 1939年2月 p.1

24) 南次郎「聯盟本来の使命 議論よりも実行へ 究極の目標は内鮮一体 総親和・総努力にあり」『総動員』第1巻第2号 国民精神総動員朝鮮聯盟 1939年7月 p.57～59。なおここでは、「本篇は昭和十四年(引用者註:1939年)五月三十日、国民精神総動員役員総会席上、南総督が挨拶として述べられたるものを速記したもの」とある。

容であると言えるだろう。しかし、「内鮮一体」の実際は、1938年2月に公布された陸軍特別志願兵令、1940年の紀元節(2月11日)より行われた創氏改名政策、さらには1942年5月に発表され、1944年度より施行された徴兵制などの過酷な政策を、1945年に「民族の結婚」が発表されたこのときまでにも朝鮮の人々に強いてきた。が、崔載瑞は例えば、徴兵制の決定に際しても、今まで「修練の機会に恵まれなかった」にもかかわらず、それまであった「半島人は国民たるの資質に於いて根本的に欠けてゐるのではあるまいかと云ふ懸念」を一掃する機会が与えられたことで、この「徴兵制の実施を契機として半島人の地位が飛躍的に向上せしめられるであらうことは明瞭である」²⁵⁾と述べている。崔載瑞はこのように、総督府や日本人が掲げた「内鮮一体」という同化のための口実を、平等のための条件として本気で信じていたのである。

崔載瑞は、京城帝国大学予科から、京城帝国大学法文学部英文科に入学し、1931年に第3期生として卒業。²⁶⁾その後大学院に進学し、大学院を卒業後、京城帝国大学の講師に就任するという異例の出世を遂げている。崔載瑞はその経歴を見てもわかる通り、日本と常にかかわりを持った人生を歩み、また当時の最高水準のエリートとして生きた人物であった。²⁷⁾では、それはどのくらいのエリートであったのだろうか。崔載瑞が京城帝国大学入学以前に入学した京城帝国大学予科は、彼が入学した1926年は、「文科」で志願者399名に対し、入学者は80名。その後、同大学法文学部に入学した彼は、1931年に卒業をするが、彼の所属した英文学科を含む文学科の卒業生は、「内地人」8名、「朝鮮人」7名のみであった。²⁸⁾またこの文学科の中にはさらに、国語学国文学講座(2

25) 崔載瑞「徴兵制実施の文化的意義」『国民文学』第2巻第5号 人文社 1942年5・6月合併号 p.5~7

26) 当時、京城帝国大学英文科の教授で、詩人でもあった佐藤清は、後に次のように述べている。「京城帝大には、きわめて厳しく選ばれた少数の入学者で成立した予科があり、従って文学部へ来る学生は少数であっても英文科へ集まる学生は一番多い方で、秀才も少なくはなかった。殊に、朝鮮人学生の優秀なものが集まった(以下省略)」事実、第2期生(1930年卒業)には李孝石が、第3期生には崔載瑞および玄永燮が、第4期生には趙容萬といった、この数少ない京城帝大英文科の卒業生の中でも、朝鮮文学を代表する作家・評論家を輩出していることから、「朝鮮人学生の優秀なものが集まった」という上記の佐藤の言葉のそれを裏付けるものとなっている。(引用、佐藤清「京城帝大文科伝統と学風」『佐藤清全集 第3巻』詩声社 1964年11月 p.259。および参照、佐野正人「京城帝大英文科ネットワークをめぐって：植民地期韓国文学における「英文学」と二重言語創作」『国際文化研究科論集』東北大学大学院国際文化研究科 2008年12月 p.35)

27) 事実、常に日本と関わりのあった崔載瑞の人生は、彼の評論集である『転換期の朝鮮文学』の「まへがき」で次のように述べていることからもうかがえる。「私は子供の時から日本のことばと、部屋と、その礼儀正しさと、飽くまで澁刺たる学問の好奇心と特に明治文学とが好きであつた。そして私が知り合つた幾人かの内地人とは、何の隔りもなく付き合ふことが出来た。かうして私は日本を呼吸し、日本の中に育つて来た。然しそれらのことを一々意識的に日本国家と結び付けて考へるやうなことはしなかつた。要するにそれは趣味の問題であり、教養の問題だつたからである。(崔載瑞『転換期の朝鮮文学』人文社 1943年4月)

28) 京城帝国大学創立五十周年記念誌編集委員会編集『紺碧遙かに：京城帝国大学創立五十周年記念誌』京城帝国大学同窓会 1974年10月 p.765・768

講座)、朝鮮語学朝鮮文学講座(2講座)、支那語学支那文学講座(1講座)、外国語学外国文学講座(2講座)が置かれており、英文科のスタッフだけでも4名もの教授がいたという。²⁹⁾崔載瑞は、こうした少人数制のエリート養成機関に入ることができたからこそその人脈作りもでき、また、「京城帝大キャリア」として「日本の植民地支配を前提として、それを受け入れた枠組み内での社会的上昇を企図して」³⁰⁾いく。それはやがて当局としても「差別を受けていない朝鮮人啓蒙者」³¹⁾として必要な存在へと化していくこととなる。

こうしたことから崔載瑞は、いわば社会的上昇を目指すことで平等を手にいれようとした人物であったと言えよう。そうした意味では、新羅王朝に忠誠を尽すことで平等を手にいれようとした金庾信と大きく重なっている。だが、それでも金庾信が『駕洛族に対する新羅族の謂れなき侮蔑』に心を痛め続けたように、崔載瑞の中にも彼の心の中に巣くう闇の部分があったに違いない。

「内鮮一体」を信じ、『国民文学』発行の上でも様々な譲歩を重ね、徴兵制も施行され、いよいよ国民全体が日本人との平等を勝ち取れると思った頃、彼の前に新たな、そして究極とも言える命題が突きつけられる。それは「君は日本人になり切れる自信があるか？」という「簡単明瞭」でありながら、口実としては決定的ともいえる一言であった。崔載瑞はこの一言にも真剣に悩んでいる。

この質問には更に次のような疑問を起した。日本人とは何か？日本人となるためにはどうすればよいのか？日本人たるためには、朝鮮人たることをどう処理すればよいのか？

これらの疑問はもはや、知性的な理解や理論的な操作だけではどうにもならない、最後の障壁であつた。然しながらこの障壁を突き抜けない限り、八紘一宇も、内鮮一体も、大東亜共栄圏の確立も、世界新秩序の建設も総じて大東亜戦争の意義が判らなくなる。祖国観念の把握と云つても、それらの疑問に対する明確なる解答を持たぬ限り、具体的、現実的とは云へない。³²⁾

こうした更なるそして決定的な日本人の特権性保持のための言葉に、彼は「日本人とは天皇に仕へ奉る国民である」、「まつらう文学は^{マア}天皇に仕へ奉る文学である」³³⁾という一つの境地に達する。だが、当然そこには本当に「日本人となるため」の「最後の障壁」を「突き抜け」させてくれるかどうかは日本側にあるという思いを抱えていたことだろう。

29) 前掲、佐野正人論文 34頁。

30) 李建志「総動員体制下の朝鮮における支配言語と母語 — 崔載瑞をつらねて — 」『比較文学研究』第84号 東大比較文学会 2004年10月 p.39

31) 南雲智編『『緑旗』総目録・著者名別索引』汲古書院 1996年6月 p.21

32) 石田耕造(崔載瑞)「まつろふ文学」『国民文学』1944年4月号 p.5

33) 「まつろふ文学」p.3・6

「民族の結婚」において、駕洛王族側の父に続き、金春秋に対しても新羅王族に属する者同士でなければ結婚できない、「聖骨」という伝統的な制度のしがらみに苦しむ彼に、次のように述べて説得を試みる金庾信の言葉に、崔載瑞は自身の思いを重ねたことであろう。

『むつかしいことではあります。又考へやうに依つては反逆ともなりませう。然しこゝで新羅を大きく生かすことを考へて下さい。も早や新羅は単なる新羅の新羅ではありません。三国を統一し、日本や唐とも肩を並べる新羅です。旧い幹にしがみついてそのまゝしなびてしまふか、それとも思ひ切つて新しい幹を樹てるか、こゝが大事な瀬戸際です。聖骨とは何でせうか？新羅の王族を継ぐべき貴い血筋と考へてをります。その尊厳なること、拙者の如きが妄りに口にすべきではありません。然し遠い上古は別として、奈勿王からでも既に十代二百五十年間、この貴い血筋は一步も外へは洩れたことはありません。又外から入つて来たこともありません。如何に綺麗な水でもひとゝころに溜ると生気を失ふと申します。申し難いことですが、聖骨の血筋が永いこと澱んで或は生気を失はれたのではないか、かうも考へてをります。(中略)今日新羅は敢へて、聖骨にこだはる必要はないと思ひます。さう云ふ風に池を小さく困ってしまったのでは、大きい魚は入つて来れません。両手を広げて胸を開いて下さいと云ふのはこの点であります。』³⁴⁾

もちろんここで、崔載瑞自身の考えの中に「澱んで或は生気を失はれた」日本の天皇家に朝鮮を含め、他国から王室、一般人ともに王妃を迎え入れるべきだというのではなく、「両手を広げて胸を開いて下さい」という部分にあるのは言うまでもない。ここにはこの頃「朝鮮唯一の文学雑誌」である『国民文学』を通じて様々な協力をし、日本に忠義を尽くしてきた自分を含めた朝鮮人を、どうして「池を小さく困ってしまう」て入れようとならないのかといった崔載瑞の悲痛な思いに受け取れるのである。つまりここでは「両手を広げて胸を開く」ことで、『どうせ行く所のない駕洛の遺民』たちであり、『喜んで飛び込んで来る』に違いないのは朝鮮人も同じであると日本側への譲歩を述べているのである。

だがしかし、「民族の結婚」での金庾信は、被支配民族である金官伽耶の王族出身の王妃を支配民族である新羅の王室に送り、正室として迎えられといった対等な結婚が行われることで初めて、駕洛族の人々への『新羅族の謂れなき侮蔑』はなくなり、『人心に至っては殆ど新羅に背いてゐると云つてもよい有様』である彼らの、『六十年の歲月』の間『決して円満とは申せ』なかつた関係も終わると考えている。このことは、被支配民族という同じような状況の中で、当時の朝鮮においてもまた、こうした不可能とも言うべき奇跡が起こらない限り、日本と朝鮮の真の「内鮮一体」はならず、平等は求められないということを暗に露呈させているといえるだろう。いわば、ここでは日本の支配下における「内鮮一

34) 『国民文学』第5巻第1号 p.94

体」の限界性を物語っていると言えるのである。

このことは例えば、この「民族の結婚」が掲載された1945年1月の『国民文学』においてでさえ、「処遇改善を廻りて」という座談会が開かれていることからそれはいえるだろう。この座談会で崔載瑞は、「内鮮の問題ですが、必ずしも今度の処遇改善といふことではなく、我々の理想とするのはどういふ所にあるんでせうか」³⁵⁾ (石田耕造[崔載瑞]) という質問をしているが、これに対して、「それは内鮮の別をなくすることでせうね。内鮮といふことをもう言はなくなるところまで持つてゆくことです」³⁶⁾ (長谷川理衛[京城帝大教授]) というように、崔載瑞が長年期待し、悩んできた問題がいつまでも理想として掲げられ続けていることから証明できよう。つまり、当時の朝鮮においてもまた、戦争末期のこの時期においてもなお、決して平等ではない処遇を受けていたのである。

5. 崔載瑞の闇

崔載瑞の心の中に巣くう闇の部分、それをうかがわせるエピソードとして、崔載瑞がまだ京城帝大英文科の学生だった頃、国文科の教授であった高木市之助は、崔載瑞についての回想を後に次のように述べている。

崔載瑞という学生がいて、英文学を専攻しておりましたが、この男は佐藤清君 — これは英文学を専攻しておりましたが、(中略) 佐藤君はこの崔君をすごくかわいがっていました。卒業後は講師になったりして、私のところへもよく遊びに来て、学生時代は親日派と見られて朝鮮人の学生から殴られたことがあるほどです。ところがこの崔君がある正月の休日にビール瓶二、三本ぶらさげて、ものすごい形相で夜更けに私のところへ訪ねて来て、「先生たちはどんなにいばったって僕たち朝鮮人の魂を奪うことはできないよ!」というような凄文句を並べて、またフラフラと出て行ったことがある。彼が酒癖が悪かったからだと言えばそれまでの話だが、私にはそうばかりとは思われない。³⁷⁾

ここでの崔載瑞が『朝鮮人の魂を奪うことはできない』と言った民族意識の表白は、『朝鮮人の魂』を語る上での朝鮮語文学に対して、いかなる思いを持っていたのかを推察

35) 当時、崔載瑞は創氏改名により石田耕造という名を使用しており、ここでは石田耕造名での発言となっている。

36) 座談会「処遇改善を廻りて」の出席者は、石田耕造および、長谷川理衛のほか、田保橋潔[京城帝大教授]・車載貞[評論家]・俵史夫[評論家]の3人。(引用は、「処遇改善を廻りて」『国民文学』第5巻第1号 p.15)

37) 高木市之助『国文学五十年』岩波新書 1967年1月 p.139~140

させるのに十分なものといえるだろう。『国民文学』朝鮮語版が執筆人不足により日本語雑誌への転換を余儀なくされた際、「今日に於いて一般大衆に取つて諺文文学が必要欠く可からざるものであることは論を俟たぬ所であり」、「弊社は年数回程度の諺文創作集を発行致し、この方面に於いても弊社が抱懐せる革新運動を続けるつもりであります」といい、文壇空白時代を作ってはならず、更なる雑誌発行に意欲を持ち続けたのも、今だ日本語を理解しない多くの朝鮮人たちの魂に訴え続けたいという意欲が彼を支えていたことであろう。事実、『国民文学』が発行された1941年における日本語解読者は、第3次朝鮮教育令や京城府学務局や国民総力朝鮮連盟などによる講習活動による成果により約400万人と、1935年に比べて日本語解読者は約2倍に増えたが、それでも全朝鮮人総数での割合は、わずか16.61%³⁸⁾に過ぎなかったのである。

さらに上記のように崔載瑞の酒癖を含めて、もう一人、人間崔載瑞についてのエピソードを書いている人間が田中英光である。田中英光は、彼の「酔いどれ船」において、崔載瑞をモデルとした崔健榮という人物を登場させ、崔健榮の心の中に掬う闇の部分について触れている。

……軽石のような仏頂面で崔健榮が入ってくる。この人は昔、京城帝大始まって以来の好成績で、英文科を卒業し、かつてはマルクシズム文芸理論家として、朝鮮第一の人物だったという。その故か、石のような頑固さがあり、今でも時によると、本府の役人なぞに、火の玉のような勢いで食って掛る。役人はしまいには、いつもの権力で、相手を圧倒する。そんな風に圧倒された時の、崔の口惜しそうな顔は、見ているひとの心まで、暗く悲しくする程の凄まじさだった。それ故、誰もがいま、崔の胸に一物あり、素直に生きていないのを感じている。だがそれだけに、彼の裏面の生活はやはり日本の軍官権力と結びついていたものと想像される。だから、彼は泣いても泣き切れぬ生活をしているのだろう。酔った時の酒癖の悪さは有名だった。唐島博士でも、都田二郎でも見境いない。腹の底から軽蔑している態度で、泣くがごとく怒号し、手もとにある皿小鉢、手当り次第に、叫きつけるのだった。³⁹⁾

朝鮮在住中、『国民文学』にもいくつかの作品を発表し、またに朝鮮文人協会の常任幹事となって崔載瑞を近くから見ていた田中英光にとっても、彼の酒癖の悪さは「誰もがいま、崔の胸に一物あり、素直に生きていないのを感じている」ほどに写っていた。また自説を権力で圧倒された際の「口惜しそうな顔は、見ているひとの心まで、暗く悲しくする程の凄まじさ」と形容するほどのからも、彼がどのような思いで日本に協力をして、また『国民文学』発行の3年半の間に、どれだけ自説を曲げざるを得ず、くやしい思いを重ねてきたのかをもうかがわせる。

「民族の結婚」において、金春秋と文姫の結婚を両家の家族から、制度や長年のしこりに

38) 林鐘国 大村益夫訳 『親日文学論』高麗書林 1976年12月 p.12

39) 田中英光 「酔いどれ船」 『田中英光全集 第2巻』芳賀書店 1965年5月 p.274~275

よって反対された金庾信が、最後の賭けとして、上監ママが皇竜寺にお出ましになる時を見計らって家に火をつける。つまり『ふしだらな』行為によって妊娠した文姫を古来の慣習に従い、生け贄にしようとし、そして訴えようということを考える。この際、金庾信は文姫に次のように言う。

わしに命を預けてくれ。若しお前が焼き殺されたら、わしも新羅には居らぬ。きつと高句麗に起つて、頑冥不靈な新羅が目覚めるまで、焼いて焼いて焼き尽してしまはう。40)

保坂祐二は、この金庾信の文姫に対する言葉に次のような解釈をしている。

この辺りに作家崔載瑞の日本に対するもう一つの本心も隠れているようである。作家としての生命を賭けて、さらには朝鮮語による朝鮮文学の消滅という犠牲を払ってまで、『国民文学』の主幹を努め、日本語での朝鮮文学を普及しつつ日本の大東亜共栄圏建設に協力しようとする自分に対して、もし日帝が恩を仇で返すような態度を取った場合は、作家自身も反日に態度を転換することがあり得るという、日帝当局に対して間接的に警告するメッセージのようにも読み取れる。こうしてみると、作家の提示する支配民族への協力は、結局は被支配民族が生き残るためであるという構図が浮かび上がってくる。41)

「作家自身も反日に態度を転換することがあり得る」という点に関しては、この当時の彼の置かれていた状況から疑問符がつくが、ここで保坂が述べていることは先の田中英光の「酔いどれ船」からの引用にも見られるように、大いに首肯できる。崔載瑞にとって、雑誌発行の上での数々の譲歩の際、“お前はそれ程卑しめられてまで日本に仕へなくてはならぬのか？”という自問があったであろうことも想像に難くないだろう。それまでのエリートコースを歩んできた崔載瑞にとって、『国民文学』発行の3年半の間は権力に譲歩をし続け、「内鮮一体」もかなわぬものであった、いわば人生で初めての挫折続きの期間であったのである。

6. 結論

李建志は、ソウル市にある崔載瑞の出身校の京城第二高等普通学校の後身にあたる景福中高等学校で保管されている学籍簿を閲覧したというが、その記録には、「少々短気」、「自我ノ主張強キニ過ギル点アリ」、「己ノ才ヲ誇ラントシテ他ト合ハヌ所アリ」42)と記されていたと述べている。農業を営む裕福な家に生まれ、帝国大学に入学し、

40) 『国民文学』第5巻第2号 p.52

41) 前掲、保坂論文 p.238~239

42) 前掲、李建志論文 p.34~35

そのまま京城帝国大学の講師にまでなった崔載瑞は、常にエリートとしての道を歩み、その略歴を見ても、いわば挫折知らずで人生を歩んできた。おそらく彼の性格に関しても、おそらく、それまで常に結果を出し続けてきた彼は、上記のような性格を改めなければならないという大きな失敗は受けて来なかったにちがいない。崔載瑞にとって、結果的に挫折続きであった編集発行人としての『国民文学』の3年半の間は、たとえ『謂れなき侮蔑』を受けようとも、日本の寛大さを求めながら、ひたすら内鮮一体を押し進めていくことで、朝鮮民族の向上と差別の撤廃を図るという長年持った「自我ノ主張」を信じ抜きたいという思いが彼の原動力にあった。

金官伽耶の王族出身でありながら、新羅王朝に忠誠を尽す金庾信が文姫の妊娠を契機に民族を思い、伽耶民族の人々の平等と地位向上を目指し、様々な葛藤をする様子に、「内鮮一体」を押し進め、日本に忠誠を尽くす崔載瑞の当時を重ねて考えた時、この「民族の結婚」は、文学作品としての完成度の高さ以上に魅力的に読むことができると言えよう。

【参考文献】

- 李慧眞[Lee Hae Jin 이혜진](2011) “충동원체제하의 최재서의 일본어소설” 『批評文学』 한국비평문학회 No.41 p.376·377·379
- 宋비ョン삼[Song Byeong Sam 송병삼](2013) “역사를 이야기하는 욕망, 주체를 구성하는 서사 - 신채호의 꿈하늘 의 경우와 최재서의 비시의 화, 민족의 결혼의 경우” 『南道文化研究』 순천대학교 남도문화연구소 Vol.25 p.333·343
- 李建志(2004) 「總動員体制下の朝鮮における支配言語と母語 — 崔載瑞をつらいて — 」 『比較文学研究』 第84号 東大比較文学会 p.34~35·39
- 一然 金思燁訳(1997) 『完訳:三国遺事』 明石書店 p.110~111
- 林鐘国 大村益夫訳(1976) 『親日文学論』 高麗書林 p.12
- 大村益夫 「『国民文学』 解題」 (人文社編 復刻版『国民文学』 別冊 綠蔭書房 1998年4月 p.5~6·8)
- 加藤武雄 「朝鮮の文学について」 『国民文学』 第5卷第3号 1945年3月 p.11
- 金富軾 林英樹訳(1974) 『三国史記上新羅本紀』 三一書房 p.107
- 京城帝国大学創立五十周年記念誌編集委員会編集(1974) 『紺碧遙かに: 京城帝国大学創立五十周年記念誌』 京城帝国大学同窓会 p.765·768

- 「編輯後記」(1941)『国民文学』第1巻第1号
- 「国語雑誌への転換」(1942)『国民文学』第2巻第5号 p.44
- 佐藤清(1964)「京城帝大文科伝統と学風」『佐藤清全集 第3巻』詩声社 p.259
- 佐野正人(2008)「京城帝大英文科ネットワークをめぐって：植民地期韓国文学における「英文学」と二重言語創作」『国際文化研究科論集』第16号 東北大学大学院国際文化研究科 p.34・35
- 高木市之助(1967)『国文学五十年』岩波新書 1967年1月 p.139～140
- 田中英光(1965)「酔いどれ船」『田中英光全集 第2巻』芳賀書店 p.274～275
- 田村榮章(2007)「『国民文学』の変容 — 崔載瑞1941—1945」、『日本語文学』第32輯 韓国日本語文学会 2007年3月
- 朝鮮総督府(1937)『秘 朝鮮施政の一斑』(民族問題研究所編『日帝下戦時體制期 政策史料叢書 第49巻 總動員政策斗 團體1』韓國學術情報 2001年4月 p.292～293)
- 崔載瑞(1942)「子よ安らかに 亡児剛に贈る」『国民文学』第2巻第1号 人文社 1942年1月 p.93
- 崔載瑞(1942)「徴兵制実施の文化的意義」『国民文学』第2巻第5号 人文社 p.5～7
- 崔載瑞(1942)「編輯を了へて」『国民文学』第2巻第5号 人文社 p.208
- 崔載瑞(1942)「朝鮮文学の現段階」『国民文学』第2巻第7号 人文社 p.12～13
- 崔載瑞(1943)「報道演習班」『国民文学』第3巻第7号 人文社
- 崔載瑞(1944)「燧石」『国民文学』第4巻第1号 人文社
- 崔載瑞(1944)「月城君の従軍」『緑旗』第9巻第2号 緑旗連盟
- 石田耕人 [崔載瑞] (1944)「非時の花」『国民文学』第4巻第5号～第8号 人文社
- 崔載瑞(1943)「まへがき」『転換期の朝鮮文学』人文社
- 石田耕造[崔載瑞](1944)「まつろふ文学」『国民文学』第4巻第4号 人文社 p.3・5～6
- 石田耕造[崔載瑞]・車載貞・田保橋潔・俵史夫・長谷川理衛 (1945)「処遇改善を廻りて」『国民文学』第5巻第1号 人文社 p.15
- 石田耕人[崔載瑞](1945)「民族の結婚」『国民文学』第5巻第1号・第2号
- 南雲智編(1996)『『緑旗』総目録・著者名別索引』汲古書院 p.21
- 玄永燮(1939)『新生朝鮮の出発』大阪屋号書店 p.1
- 保坂祐二 (2005)「崔載瑞の日本語歴史小説考察 — 小説「民族の結婚」を中心に」『日本語文化』第7輯 韓国日本語文化学会 p.238～239
- 南次郎(1939)「聯盟本来の使命 議論よりも実行へ 究極の目標は内鮮一体 総親和・総努力にあり」『総動員』第1巻第2号 国民精神総動員朝鮮聯盟 p.57～59

要 旨

“국민문학”(國民文學) 1945년 1월호·2월호에 발표된 최재서(崔載瑞)의 일본어 소설 “민족의 결혼”(民族の結婚)은 13세기 말에 고려의 승려 일연(一然)에 의해 쓰여진 사찬(私撰)사서인 “삼국유사”(三國遺事) 및 조선반도의 현존하는 최고(最古)의 역사서인 관찬(官撰) 김부식(金富軾)의 “삼국사기(三國史記)”(1145년)에 기록된 이야기를 바탕으로 만들어진 역사소설이다. 그러나 “삼국유사”나 “삼국사기”에 원래 기록된 것은 각각 “태종춘추공”(太宗春秋公) 및 “문무왕(상)”(文武王(上))의 문장 속에서 어느 것도 극히 일부에 지나지 않고, “민족의 결혼”은 이야기의 틀만을 빌리고 나머지는 대부분이 최재서의 창작이라고 해도 좋다. 이렇듯 기본적인 설정만을 “삼국유사”나 “삼국사기”를 기초로 한 “민족의 결혼”이지만 최재서는 그 내용을 깊게 파고들어 당시의 식민지배라는 상황에서 일본에 대해서나 식민지치하에 있는 조선이라는 자국에 대한 조선인의 복잡한 감정과 생각까지도 엿보게 하는 내용이 그려져 있다.

최재서는 1945년도까지 일본어소설을 5편 썼지만 그 5편은 자신이 편집발행인으로 있었던 “국민문학”을 중심으로 발표되었다. “보도훈련팀(報道演習班)”, “부싯돌(燧石)”, “즈키시로군의 종군(月城君の從軍)”, “비시의 꽃(非時の花)” 그리고 “민족의 결혼”의 5편이다. 조선인 모두 징병제가 결정되고 총동원체제가 가열화되어 가는 가운데 “국민문학”도 또한 집필자가 줄고 잡지의 존속이 위험해질 때 이후에 쓰여진 것이다. 이 작품 중에서도 “보도훈련팀(報道演習班)”과 “부싯돌(燧石)”, “즈키시로군의 종군(月城君の從軍)”은 시국소설이며 노골적인 전쟁찬양과 황국찬양이 곳곳에 쓰여져 있는 것도 있어 작품으로써는 깊이는 없고 예술성도 낮게 평가되고 있다. 한편으로 “비시의 꽃(非時の花)”도 역시 일본찬양과 황국찬양이 곳곳에 쓰여있어 이 소설들이 작품적 가치를 폄하하고 있다는 느낌은 부정할 수 없다. 따라서 작품의 깊이와 예술성은 “민족의 결혼”과 비교했을 때 저급하다고 밖에 말할 수 없다. 그런 가운데 “민족의 결혼”은 이데올로기의 티가 나지 않고 노골적인 일본찬양도 찾아 볼 수 없다. 이런 점부터도 작품의 완성도와 예술성은 상당히 높고 최재서의 일본어작품 중 최고의 걸작이라 할 수 있는 작품이라 말할 수 있다.

1941년 11월부터 1945년 5월까지 발행된 식민지시대 마지막 문예잡지인 “국민문학”의 편집발행인인 최재서는, “국민문학”이 일본어잡지라는 잡지의 성격에서 봤을 때 “조선어말살”이라는 총독부 통치정책에 적극적으로 협조한 친일적성향의 인물이다. 라는 것이 지금까지 전해져 온 그에 대한 평가였다.

하지만 어디까지나 당시의 상황에 처해 생각해 보아도 이러한 일원적인 견해로 끝날 정도로 단순했다고는 말하지 못할 것이다. 그것은 “민족의 결혼”에서 보았을 때 또한 신라에 통합된 금관가야의 왕족 출신인 주인공 ‘김유신’이, 신라의 무장이

면서도 가야족으로서의 정체성을 지닌 그 생각, 또는 다양한 갈등과 알력이 그려져 있지만 그런 주인공 '김유신'의 내면에도 최재서의 복잡한 마음이 담겨 있다고 말할 수 있다. 작품을 분석하는 것과 동시에 1945년 전쟁 말기 당시의 사회 상황과 “국민문학”지를 둘러싼 환경 등을 포함해 모두 고찰하고 싶다.

キーワード： 「内鮮一体」 · 「聖骨」 · 「内鮮結婚」 · 相似の關係 · 「民族の結婚」

투 고 : 2014. 8. 31
1차 심사 : 2014. 9. 13
2차 심사 : 2014. 10. 4